

通常学級における ASD 児を念頭においた工夫

—どのように TEACCH を活かせるか—

Structured Teaching Methods for Children with ASD in General Education Classes:
How to Utilize a Structured TEACCHing Approach to School Education

小田桐 早苗*¹ 諏訪 利明*¹

要 旨

本稿では、小学校の通常学級に在籍する自閉スペクトラム症児に対する学習教材について、TEACCH Autism Program における自閉スペクトラム症の独自の認知特性の視点から提案を行うものである。特に、1.概念を明確すること、2.順序立てること、3.注意を向け、取り組みを助けること、4.情報と教材を整理して示すことを助けるための視覚的な工夫について概観する。

Keywords : 自閉スペクトラム症, 通常学級, TEACCH Autism Program
Autism Spectrum Disorder, general education class, Structured TEACCHing

1. 問題

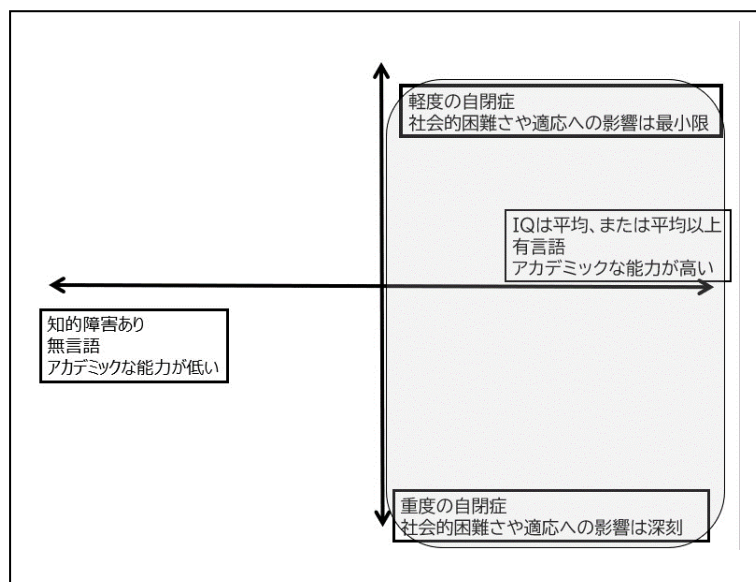
自閉スペクトラム症 (Autism Spectrum Disorder : 以下 ASD とする) については、様態の幅広さが示されている。このことから医療、福祉、教育における多様なニーズへの支援が求められている。

文部科学省による通常の学級に在籍する発達障害の可能性のある特別な教育的支援を必要とする児童生徒に関する調査が平成 24 年に実施され、10 年以上が経過した。この間、発達障害者支援法の改正、高等学校における通級指導の制度化、小・中・高等学校の学習指導要領における特別支援教育に係る記述の充足など ASD を含めた発達障害の児童生徒をめぐる様々な変化がみられている。令和 4 年の文部科学省「通常の学級に在籍する特別な教育的支援を必要とする児童生徒に関する調査」結果においては、小・中学校の通常学級において「学習面又は行動面で著しい困難を示す」とされた児童生徒の割合は、8.8%にのぼる¹⁾。このような状況の中で、小学校の通常学級に在籍する児童への教育を保障する上で、発達障害の中核的障害である ASD の認知特性に応じた配慮の視点は欠くことができないのではないだろうか。インクルーシブ教育システムの理念に基づいた通常学級における ASD 児への教育的支援の視点を検討したい。

*¹ 川崎医療福祉大学 医療福祉学部医療福祉学科
社会連携センター TEACCH Autism Program

2. 通常学級における自閉スペクトラム症（ASD）

図 1 に示すとおり通常学級に在籍する児童は、知的には IQ100 前後、あるいはそれ以上ということが想定される。つまり、図 1 で示す右側にその児童像が集約されると想定される。知的な問題は生じがたいとする中で、児童が困難さを生じる部分はどこになるだろうか。その点は、個々の ASD の状態像に影響されると推察される。



通常学級で授業を展開することを考えると、このような、多様な児童のあり様に合わせて、その教育ニーズに応えることが求められる。そこで、ASD 児に特有の認知特性に基づいた視点から学級で用いる教材の検討を行うことは、ASD 児を含めた学級指導において有用であろうと考えられる。

図 1 知的障害と自閉スペクトラム症の概観

3. 自閉スペクトラム症の認知特性に応じた教材の配慮

アメリカノースカロライナ大学において、ASD 者の生涯にわたる支援プログラムとして提案される TEACCH Autism Program では、学級における TEACCH のアプローチとして、以下の要素を提案している。1. カリキュラム、2. グループ分け、3. スケジュール、4. 移動、5. 物理的整理統合、である²⁾。これらの要素は、ASD の認知特性（TEACCH Autism Program では、学習スタイルとして定義している。本稿では詳細を省くが、別稿の諏訪利明氏の論考により概観されているので、そちらを参考いただきたい。）から考えると、ASD 児が教育機関において自立的に学び、生活する上で重要であるとされる。本稿では、上記 5 点のアプローチの中で、1 のカリキュラムの工夫の中の教材の工夫について概観する。これは、実際にインクルーシブ教育下で共に学ぶための重要な柱の一つとなりうると考えるためである。

TEACCH Autism Program では、ASD 児に対して考慮すべきこととして、個別化を挙げている。個別化の視点として、認知特性（学習スタイル）、発達レベル、本人のもつ強みと興味関心を活かすことが重要となる。具体的に述べるなら、ASD の認知特性から示される 1. 概念理解の困難さ、2. 実行機能の困難さによる順序だての困難さ、3. 注意の向け方の違い、4. 情報と教材の整理の困難さへの配慮、が通常学級においても求められ、その困難さを補うためのアプローチとして、ASD 児の強みである視覚的支援を活用するという提案である。

3.1 概念を明確にする

ASD 児においては、聴覚情報処理の遅延がしばしば示されるとされる。通常学級において、話し言葉での指示ややり取りを用いて授業を進めることは一般的である。しかし、ASD 児においては、その話し言葉の理解が追いつかず授業についていけなくなる状態が生じてしまうことがある。このような指示を的確に把握するためにも、情報が視覚的に保障されることは、取り組みを助ける配慮となる。併せて、抽象的な概念を理解することも苦手さとなりやすい。他者の言わんとすることを想像し、概念として形成することの苦手さが生じやすいためである。この点を補うために、教材の中に絵や写真を用いて具体的なイメージの形成を助けることは児童にとって助けとなるものと思われる。

3.2 順序だてる

授業において何かに取り組むとき、何事にも手順がある。ノートを取ることに、絵を描くことに、調理をすること、グループで話し合うことなど多岐にわたる活動には、それぞれに求められる手順がある。沢山の情報の中で、目的を遂行するためにどのような順番で取り組めばよいかを組み立てる必要性が生じる。ASD 児においては、瞬時に状況や情報を把握し、どのように進めるかを判断し行動に移す苦手さが生じることがある。実行機能の苦手さとして、学級の中でもやるべきことができない場合がある。このような状況を助けるために、求められていることを遂行するには、何をどのような順番で取り組めることが良いのかを示されることは助けになるとされる。例えば、1, 2, 3 といったように順序が示されていることや、示された手順が今どこまで進んでいて残りがどれだけなのかを見て理解できるように、終了した項目についてはチェックボックスに✓をつけること、線で消すこと、なども自分があとどれだけ取り組めばよいのかを理解しやすくなり、集中や取り掛かりを助ける。つまり、順序だての視覚的な支援に加え、進捗状況や終わりが明確になっていることは、実行機能の苦手さを助ける支援となるのである。

3.3 注意を向け取り組みを助ける

ASD 児の認知特性の困難さの一つとして、注意の向け方の違いがある。重要な情報に注意を向けるのではなく、他の細部のことに注意を向けてしまいポイントを押さえていないことが生じやすかったりする。更に、気になることに注意を向けることができる一方で、そこから別のことへ注意を移すことの苦手さにつながることもある。このような注意の向け方の特徴は、授業における教材でも生じる。例えば、1枚のプリントに多様な情報が載っている場合に、細部に注意が向いてしまい読解のための情報に意識が向いていないことや、情報量が多すぎて取りかかるとの難しさが生じるなどである。このような注意の向け方の違いをサポートするために、重要な情報にハイライトをする、一度に示す情報の量を制限するなどの方法がある。併せて、興味のあることへ注意を向けることの強みを活かして、児童の関心あるものを教材に取り入れるなども取り掛かりを助けることにつながる。

3.4 情報と教材を整理して示す

情報の整理における苦手さについては、ここまでに述べたことともつながるが、授業など

で示される多様な情報をどのように整理するとわかりやすいのか組み立てる苦手さも生じやすい。例えば、算数の問題で、プリントには問題と回答欄が示されていた。その問題と回答欄の間には比較的余白が多く示されていた。ある ASD 児は、回答欄に答えのみ記述し、途中式を答案に書かなかった。この点について、担任の先生はどのようにして式を書かないのか、これでは答えを書いていないことになるかと本人に伝えた。この点に当該児童は、何を言われているのかわからなかったと述べた。この例に学ぶなら、途中式をどこに書くべきか、明確に示されている方が、本児が取り組みやすかったと考えられる。また、本児にとって途中式を記入することが求められていることがわかるような指示が示されていれば、途中式まで記入して期待された答案になることが伝わると思われる。

教材においては、プリントであれば枠で囲む、指示と答えの場所が対応するように色で分ける、何個の例を挙げてほしいのか個数を示すなどが挙げられる。さらに、教材そのものをわけてヒント集、回答用紙など情報を分けて示すことも分かりやすさにつながる。扱い方として、素材が固定しているなども、素材のズレなど細部に注目してしまう場合はズレへの注目を外し、学ぶべきことに注意を向ける助けになることがある。

4. おわりに

ここまで、教材への工夫を概観したが改めて整理しておきたいのは、何のための工夫であるかという点である。視覚的な支援は、ASD 児にとってわかりやすい情報保障の一つとなり得る。通常学級においてその工夫を取り入れるのは、児童が自立的に学び、取り組みを助けるためである。つまり、ASD 児の認知特性に配慮した情報の提示により、学びやすさにつながるためのものである。多様な子どもたちが在籍する学級において、個別的な配慮を提供する困難さは推察されるが、本稿で取り上げた内容は、ASD 児が他の児童とともに学びあう上で重要な視点ともいえる。さらに、このような工夫は ASD 児にのみ有効なのではなく、どの児童にとっても学びを助ける要素ともなりえるのではないだろうか。8.8%在籍するとされる通常級における教育的支援を必要とする児童への学級における支援につながれば幸いである。

文 献

- 1) 文部科学省 HP 『通常の学級に在籍する特別な教育的支援を必要とする児童生徒に関する調査結果(令和4年)について』,令和4年12月13日公開.(掲載確認 2023.9.16)
https://www.mext.go.jp/content/20230524-mext-tokubetu01-000026255_01.pdf
- 2) TEACCH Autism Program, 『学級での運用』,TEACCH ファンダメンタルトレーニング 2023 テキスト,2023.

(2023年9月16日 受理)